

秋山の気象遭難とその条件

文責 原田

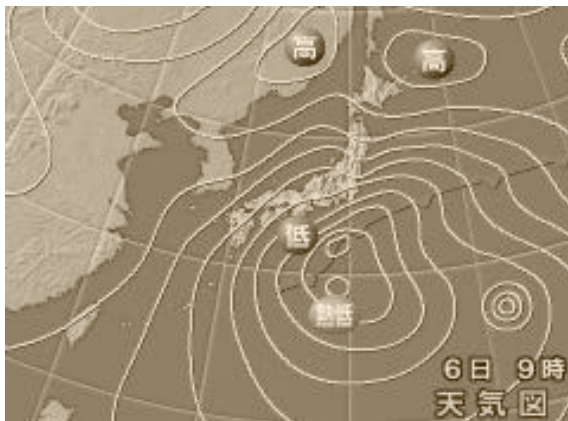
九月に入ると標高の高い山では冬支度の気象状態に入り、平地ではまだ残暑の陽気となっている時に標高の高い山では想像もできないような気象現象（風雪）が起きる。この日本列島の上空には寒気の入りやすい気象状態となり、いったん山の天気が悪化すると風雪模様となって気象遭難事故も起きやすい。

ア 冬型（西高東低型）

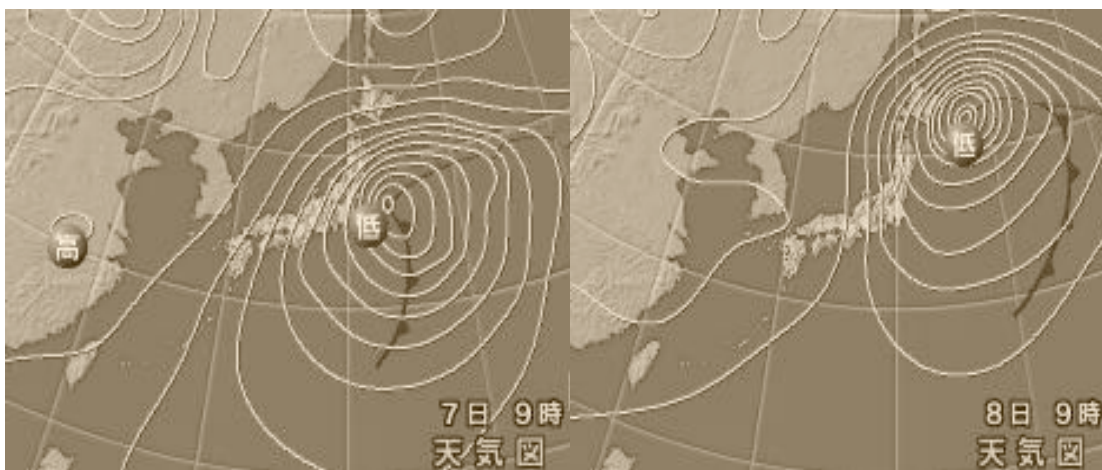
秋季になると日本列島付近を発達した低気圧や台風が通り過ぎたあと、大陸方面から寒気が入りやすくなり、気圧配置型は一時的ではあるが冬型（西高東低型）となることが多い。このため日本列島の日本海側にあたる山城では風雨の天気から風雪の天気へと急変しやすい。

（例）1989. 10. 8 立山真砂岳 8人疲労凍死

2006. 10. 8 後立山連峰 2人疲労凍死

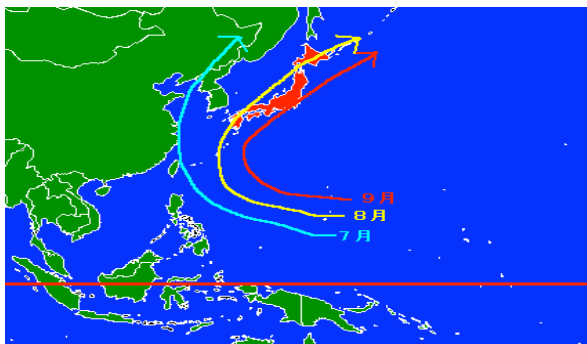


(2006. 10. 6～10. 8 の天気図)



まだ本格的な冬山ではない登山者の装備や気象の面でも風雪に対する準備不足が気象遭難の一因ともなっている。

イ 台風崩れの低気圧



秋季は台風のシーズンでもあり、たびたび台風が日本列島付近に接近、上陸することが多い。また、中国大陸に上陸したあと、温帯低気圧に変化してから日本付近へ東進してくる台風崩れの低気圧もある。この低気圧は、山岳地帯で遭遇すると台風並みの大荒れの天気を伴うので注意が必要である。

(例) 1959. 10. 18 八ヶ岳、北アルプスで遭難多数

東京大学山岳部 6人死亡

←本州南海上を通過した台風が温帯低気圧となって北東進したため、西日本から東日本にかけての広い山域で悪天となった。

この台風崩れの低気圧は発達しているため大陸方面からの寒気を引き込む型となって冬型に近い気圧配置となった。このため標高の高い山では暴風雨から暴風雪の天気になり真冬並みの形相を呈した。

秋季はこのような発達した低気圧や台風と共に、そのあとの冬型の気圧配置型への移行を常に考えておかなければならない。

台風対策

1. とにかく避難
2. 接近時は入山しない

●疲労凍死を防ぐには・・・ポイントは下着！

秋山では、体が寒さに慣れていない、防寒着対策が十分でない等の理由からみぞれや雪にあうとあっという間に疲労凍死をしてしまうことがある。

←体を濡らさない＝下着を濡らさない

綿の下着では濡れると肌に張り付き、曇や強風の中では急速に体温を奪われ、最悪の場合凍死の可能性もあるので不適切である。化学繊維の下着がベター。(パンツは・・・?)

防寒着は、秋山では朝晩は氷点下に下がることも多いので、セーター・フリース等のしっかりしたものが必要である。

最も大切なことは・・・心と体の備え

冬山ではごく普通の気象条件（気温が氷点下、雪）でも秋山では遭難が増えるのは、登山者が秋山での悪天候に危機感を持っていないことが大きい。きちんとした防寒着の準備や事前の天気の把握、「標高 3000m では平地よりも 18℃も寒く、十月の日本アルプスではいつ吹雪になってもおかしくない」という知識を持つ、等の備えをしておくことが大切であると思う。

参考文献等

文部科学省登山研修所編『登山研修』（文部科学省登山研修所、2007）

福島功夫『秋山』（山と溪谷社、1995）

<http://shizennonakade.com/gaido/tozannngijyutu/hanndann/hanndann.htm>

2007 年度勉強会資料